

豆腐買い

岡本かの子

青空文庫

おもて門の潜戸くぐりどを勇んで開けた。不意に面とむかった日本の道路の地面が加奈子の永年踏み馴れた西洋道路の石の碁盤面ごばんめんの継ぎ目のあるのとは違った、いかにも日本の東京の山の手の地面らしく、欠けた小石を二つ三つ上にのせて、風の裾に吹かれている。失礼！　と言いだい程加奈子には土が珍らしく踏むのが勿体もったいない。加奈子の靴尖くつさきが地面の皮膚の下に静脈の通つていなような所を選んで驚さぞのように、つましく踏み立つ。加奈子はすべはしゅとうにかけたシヨールを胸の辺で右手に掴つかみ止め、合せ襟あわせえりになった花と蔓つるの模様の間から手套はを穿はめていない丸い左の手を出して陽に当てて見た。年中天候のどんよりして居た西洋と比らべて日光も亦また揃そろい上げ度い程、加奈子に珍らしく勿体ない。

加奈子は夜おそく日本へ帰った。翌日から三日ばかり家の中に籠こもって片付けものらしいことをして四日目に始めて出て見る日本の外の景色が出発四年前の親しみも厚みも、まだ心に取り戻してはいなかった。ただ扁ひらたく珍らしいばかりだ。が少し歩るいて居るうちに永年居慣れた西洋の街や外景と何も彼かも比較ひかくされる。

隣家との境の醜部露出狂のような溝どぶに魚の鱗うろこが一つかみ、爛ただれた泥と水との間に捨てられていた。溜ためってぼろ布のように浮く塵ちり芥あくたに抵抗しながら鍋膏藥なべこうやくの使いからしが流

されて来た。ロンドンの六片均一店^{シキスペンスストア}で売って居る鍋膏藥は厚くて重たい程だった。世界的不況時代にせめてロンドンでの鉄の贅沢^{ぜいたく}だった。それを器用に薄く、今流れて来た日本のものは要領を得ている。外国の文化を何んでも真似て採り込むのに日本は早い。鍋膏藥の使いからは鱗の山の根にぶつかつた。鱗の崖が崩れて水に滑り落ちた幾片は小紋ぢらしのように流れて行く。ちち色の水を透して射る鱗の閃き^{ひらめ}に加奈子の眼は刺激されて溝と眼との幅、一メートル八インチ半程の日本ではじめての「距離」を感じる。

加奈子はようやく距離を感じ出した眼をあげて前町をみると両側の屋並が低くて末の方は空の裾にもぐり込もうとしている。町の何もかにもが低い。

周囲の高い西洋の町であれ程背低だった加奈子が今茲^{ここ}ではひどく背高のつぽになった氣持だ。おまけに靴の尖まで陽が当る。踊の組子なら影の垣に引つ込^{こま}されてスターにだけ浴せかけられる取って置き^{おき}の金色照明を浴びたようで何だか恥かしい——わたしは威張って見えやしないだろうか。

加奈子はロンドン市長と市民のおかみさんとの問答を思い起した。おかみさんはいった。「ロンドンの横町は光線の小布れしか売って呉れません」市長は溜息をついて言った。

「只である筈^{はず}の日光と空気にロndonはこれでも世界一の仕入値段を払っているのですぞ」

建物の低い日本の空の広さ。外人観光客へ勧める宣伝文に「日本は世界一の空の都」と観光局はつけ加えていい。

空の美しさ。それは紗しゃの面布のようにすぐ近く唇にすすって含めるし遠くは想いを海王星の果てまでも運んで呉れる。

パリ
巴里の空は寒天の寄せものだし、
ベルリン
柏林の空は硝子ガラス製だし、
ロンドン
倫敦の空は石綿だった。
そしていまこの日本の空は――

加奈子は手を差し延べて空の肌目きめを一つかみ掴み取ってみる。絹ではない。水ではない。紙ではない。夢？ 何か恐ろしいようだ。

これがもし夢であるとすればこの大きな夢を誰がどこで夢みているのだろうか。この二月でもない、四月でもない、三月にふさわしい三月の空を。これに較べると西洋の都会と空の雇傭契約は大ざっぱだ。一年を夏冬二期の空に分けて頭の上で交替させる。

加奈子は窓と窓下の子供に道路の通俗性を感じながら五六歩あるいた。電柱を見上げる。どうもそうだったのだ。さつきから賑やかな町の景色、にぎやかな町の景色、といつか思っていたのはこの電柱街路樹のためだったのだ。そっくりこのままの樹がどこかの山にありそうだ。梢こずえにきちょうめんに横に並んだ枝を出して白い蕾つぼみをつけて葉は無い。電信工夫

は山からその樹を抜いて来てバナナのように皮を剥いただけで地に立てる。東洋ほど自然に寵愛ちようあいされ、自然を原形のまま利用するのを許されている国々にこのくらいな植物は探したら無いことはなからう。蔓から壇ボットルがぶら下る瓢箪ひょうたん。幹の中に空気の並んだ部屋のある竹。東洋は面白いな。巴里の郊外にも電柱はあったが道筋の家の壁や屋根を借りて取り付けたもので長さも小さく小鬢こびんこうがいに筍を挿したほどの恰好だ。ヴェルサイユへ行く道の退屈さに自動車の窓から眺めてフランス人の儉約と結びつけて考えて見たものだった。

湯屋の煙突の煙が吹き下りて来る、不安なおい。屑くずものを焼くせいだろうか。

湯屋の内部を想像する。裸体を見られたら腰のまわりはうっちゃって置いても乳房を押える西洋の女。その乳房をみずみずしい果物の熟果なりもののように胸にぶら下げてぶりぶり震わせながら二三人ずつも向き合って身体を洗っている日本のお湯屋の内部の女。女の乳房というものは賑やかなものだ。あれは女の胸にある肉の熟章くんしょうだ。女の胸に乳房が無かったらと考えて、もしそうになったら男は女を抱かなくなるだろう。女に逢いに行くことをベルを押しに行くといった若い仏蘭西人フランスがあった。なるほど乳房はベルに似ている。

どこかに火事でもありそうなおい。

もちろん、それは湯屋の煙突の煙りのおいだが、米屋の角を出て広い市の電車通りに

出ても日本の都特有の不安な気持ちはあの煙のにおいと一脈の連絡を持っているように考えられる。不安な気持ちが揺り動かす日本の都会の若さと澆^{はつちつ}刺^{ほこり}さ。挨^{はこり}だらけの円タクが加奈子を実倒しでもするように乗りつけて来てブレーキをかけても異様な音と共に一二寸^{すん}乾いた土の上を滑る。

——いかが？　どちらまで？」という性急な若者の言葉と、

——否^{ソシ}、ムツシユウ」と言い馴れた西洋の言葉を出して仕舞って顔を赭^{あか}くした加奈子の言葉とが正面衝突をする。

加奈子とこの円タクとの交渉がまとまらなかつたらと、その後二台、電車線路を越した向うに一台、形の違った円タクが客を奪^とろうと隙をねらっている。

加奈子はショールの下に隠していた提げ菓子皿を持上げて、振って円タクのみんなに

「いらない」合図をする、四台の車の窓から四つの鋭い眼が引込んで道路は再び無慈悲な爆音に蹴立てられる。

この提げ菓子皿の取手^{とって}は伊太利^{イタリー}フローレンスで買った。ダンテとベアトリーチエがめぐり合ったというアルノー河には冬の霧が一ぱいかかっていた。両側の歩道に店を持つ橋が霧の上にかかっていた。たそがれ。売品の首飾りや耳飾りが簾^{すだれ}のように下っている軒の間

から爆発したような灯が透けていた。その並び店の中の一軒だった。骨董品店^{こつとうひん}があつた。もとよりニセ物のビザンチン石彫の破片やエトラスカの土焼皿などもあつて外人相手の店には違いないがその列^{なら}んだ品物のなかにこの葡萄の蔓模様の鉄の取手があつたのに加奈子は心をひかれた。模様の蔓と葉が中世紀特有のしつく武骨な絡みかたをしていて血でもにじみ出そうで色は黒かった。その時は有り合せの硝子皿に取りつけてあつたが外^はずして何の皿^どの提手^{とつて}にすることもできた。加奈子はこれを買った。そして、これにつり合う皿を独逸^{ドイツ}××会社の硬製陶器から見つけて一つの提げ皿に組立てた。日本へ帰ったら第一にお豆腐を自分で買いに行こう。おそらくあんな古典的な食物はない。お豆腐をこの容物^{いれもの}へ入れてわたしの丸い手がこれを提げた姿を気狂いのお京さんに見せてやろう。そしたらお京さんはひよつとしたら悦ぶかも知れない。

焼芋屋の隣に理髪店があるという平凡な軒並も加奈子には珍らしかった。その筋向うにガス^{ガス}瓦斯器具一切を売る安普請^{やすぶしん}の西洋館がある。

外国に行く四年前まではこの家は地震で曲つたままの古家で薪炭^{しんたん}を商^{あき}なつていた。薪炭商から瓦斯の道具を売る店へ、文化進展の当然の過程だ。だが椅子へ不釣合^{ふてうあひ}いにこどもを抱えて腰かけているおかみさんはもとのおかみさんに違いないが人相はすっかり變つて

いる。前にはただだぶだぶして食べたものが腸でこなれて行くのをみんな喇叭管^{らっぱかん}へ吸収して卵子にしてしまう女の作業を何の不思議もなさそうに厚い脂肪で包んでいるおかみさんだった。いまは瘠^やせてしまつて心配そうな太い静脈が額に絡み合っている。亭主の不身持か、世帯の苦劳か、産後からひき起した不健康か。一番大きな原因に思えそうなのはもうすっかり命数だけの子供を生んでしまつたので、自然から不用を申渡されたからではあるまいか。

そうなるといままで気がつかなくつた不思議さが万物の上に映り出すとみえてあの見廻すキョトキョトした眼付き——おかみさんにはどこか役離れがしてもまだ落付かない思い切りの悪い神経質の様子が見える。

襟巻を外しながら亭主が帰つて来ておかみさんの膝の赤ん坊の赤い足を着物の裾^{すそ}の中から探し出して握つた。どういふわけだかちよつと赤ん坊の足の裏のにおいを嗅ぐ。人の好さそうな肉体の勝つた亭主だ。この種の人間は物を握つたり重量をみたりすることによつて愛情が感じられるらしい。加奈子は裸の赤ん坊の温気で重量器の磨き上げた真鍮^{しんちゅう}の鎖が曇るストックホルムの優良児の奨励共進会を思い出した。わずかな重量を増そうと量る前に腹一ぱい父親の命令で赤ん坊に乳を飲ましていた雀斑^{そばかす}だらけの母親をも思い出

した。

五六軒先の荒物屋の溝板と溝板の上のバケツや焙烙ほうろくが鳴って十六七の男の子が飛出して来た。右側に通る電車の後を敏捷びんしょうに突き切り途端に鼻先きを掠かすめる左側の電車を、線路の中道に立止まって遣り過すときに掌で電車の腹を撫なでる。撫でられた電車の腹はそこだけ埃ほこりを擦り除られた春光にピカピカ映るワニスの光沢を明瞭に一筋のこしてガタンガタン交叉点の進メの信号に向つてうねを打つて行く。男の子はそのあとの線路をハイハードルのコツで大きく高く跳ね越えて丁度踏み出す加奈子の靴尖に踏み立つ。

少年と青年の間の年頃の男の子は、すこしむつとして顔を赭あかくして除よけて通つて行く加奈子の横顔から断髪そりの頸筋の青い剃そりあとを珍らしそうに見詰め何かはやり唄をうたい乍ながら、腰で唄の調子を取りながら暫く立止まっている。

つい先頃まで流行して居たはやり唄が和訳されてもう町の童わらべの唇に上っている。なんて早い日本だろう。それよりもさきほどから弾丸のように飛出して来て敏捷の間にいくつもの早業はやわざをやる男の子の手足が生きて加奈子の眼底に残った。加奈子は五六歩過ぎてからまた振返つて男の子をみた。男の子はマツチの包みと割箸わりばしの袋とを左右の手で巧たくみに投なげながら唄に合せる腰の調子は相変らずやめずになおもこつちを見つづけている。

ロンドン
倫敦

へ日本の芝居がかかった事があつた。座長は大阪の三流どこの俳優で幹部二三人の外はアメリカで仕込んだ素人だから見ていてトテモはらはらした。だがそこで不思議な日本を見た。狐忠信の幕で若い日本の娘たちが花四天になって踊るのだが外人の踊りを見慣れた眼には娘の手足がまるで唐草模様のように巻いたりくねって動くのが人間より抜けていた。顔と身体は人形で手足だけ人間以上の生命を盛っている。そういえばパリの踊り場でみる日本のタンゴというものが腰に異様なねばりと業があつてみんな女と柔道をやっているもののように眺められた。三度目に加奈子が振返ったときに男の子は定めた方向へ行くのをやめて加奈子の方へついて来た。加奈子は男の子の飛出した荒物屋を眺めた。

日々に壊滅して行く伯林の小産階級。あすこでこういう程度の荒物屋は荒物商いだけでは勿論足りないので大概素人洗濯を内職にしていた。親一人、子一人。娘が一人あるにはあるが他所へ間借りをして職業婦人になっている。かたわら富裕な外国人を友達に持ちたがっている。持つかと思うと不器量で逃げられる。母親の手一つでやる素人洗濯だが西洋の肌着のことゆえ蠟引だけは専門家同様しなくてはならない。それで狭い土間に一ぱいの火のし機械を据えている。暇があればそれに取りついていて彼女自身もすっかり乾燥してしまっている。歐洲大戦で毒瓦斯を吸い込んで肺を悪くしてじりじり死んで行つた

夫の話は人事のようにペラペラ喋るが眼の前にしきりなしにおちて来るいつもの緊急令には恨めしい眼をして黙ってしまふ。それでも営業している手前どうせ税の増えることばかりだ。そして息子はナチス。やつと月謝を工面して体操学校へ通って中等教員の免状を取るつもりだがその免状を取ってからにしても殆んど就職の当てはない。道路工事や雪掻き仕事があればいつでも学校を休んでその方へ行く。けれども僅かながらも資本をおろし、商ないをしている家に育った息子だけに純粹の労働者にはなり切れない。そこでナチス。横町の酒店の支部にしょっちゅう集まって支部旗の上げ下ろしの手伝いもやる。スケート館に大会のあるときは決死隊の一人になって演壇に背中を向けて入口を睨み立ち列んでいる。リンデンの街路樹が一日に落葉し暫らく広く見えている伯林の空にやがて雪雲が覆い冠さつて来ると古風な酒店の入口にビールの新酒の看板が出る。夜町の舗道は急に賑い出す。その名ごりの酔いどれの声が十二時過ぎになって断続して消えかかろうとする頃いつも加奈子の家の軒下を乱れた靴音で通り過ぎて行く一組がある。五六軒先の荒物屋の母だ。息子が母親を担いでいるときもある。母親が息子を担いでいるときもある。息子が母親に担がれているときは息子が酔いすぎてとてもはしやいである。母親が息子に担がれて帰るときは母親が酔いすぎて大概泣いている。焙き出したばかりの暖炉の前で加奈子

が土の底冷えをしみじみ床を通して感じた^{ドイツ}独逸の思い出である。

まだ子供とはいいいながら日本人にあとをつけられるのは気味の悪いものだ。これに引きかえ西洋人のつけて来るのはあまい感じがする。西洋では不良男にもフェミニズムが染み込んでゐるせいだろうか。加奈子はよく人につけられる性質の女だ。

——それはあなたの^{すべて}全てが普通の人のリズムと違つていて人に目立つからだ」或る友達は笑いながら加奈子に^こ斯ういった。

——嫌になつちやう」と加奈子が手足をじたばたさせると友達はそのを指して、

——それそこがもう人並外れのところよ」といった。

いろいろの経験からついて来る人間に手がかりを与えないのは却つてそれに氣を奪われない事だということを加奈子は心得ているので何気なく振舞うために續いて町並を点検して行く。

塀にも屋根の上にも一ぱいに専門の皮膚、泌尿科を麗々しく広告している医学博士。負けずに立看板や色垂簾で店を武装している雑誌店。これに氣付かされて注意すると日本の町は随分広告の多い町だ。倒した古材木の頭にむしろを冠せたのが覗いている露地口には^{たけのこ}筍のように標柱が頭を競つている。小児科の医者、特許弁理士、もう一つ内科呼吸器科の

医者、派出婦会、姓名判断の占師、遠慮深くうしろの方から細い首を出して長唄の師匠の標柱が藍色の杵きねの紋をつけている。「古土タダアゲマス」屋根に書いて破目はめに打付けてあるその露地へ入って行つた女は白足袋しろたびの鼠色になった裏がすっかり見えるように吾妻下駄あずまげたの上でひつくらかえす歩き方を繰り返して行く。

お京さんがフランス人の夫アンリーから最後に逃げて隠れていたのは丁度こういう露地の中の家だった。二人で町で買物をしてご飯も食べたあと暗くなつてお京さんを隠れ家へ送り届けようと、その露地口へ入るときお京さんは痙攣けいれんしている右の手で胸に十字を切つた。なぜと訊くと、

——あの俵たわらの冠せてある水溜りをうまく越しますように」といった。そしてもしそれにうつかり踏込みでもするとぷりぷり憤つてまた露地口まで戻つて来て、そこで足数を考え合せ露地入りをやり直すのだった。また踏み込む。するといくどでも遣り遂やとげるまでは強情に繰り返すのだった。しまいには瞳すわが据つて鼻の孔あなを大きく開けて荒い息をしている顔が軒燈で物凄かつた。しかし懷中電燈を買おうと言つても承知しなかつた。もうあのとき気が変になつていたのだ。けれども若し首尾よく水溜りを越したとなるとお京さんはふだんの生絹のような女になつて後からついて行く加奈子の手を執つて無事に跨またぎ越さすのだつ

た。そのとき綺麗な声で、

——アッタンシオンよ」と言つた。それから、

——注意よ」という言葉も使つた。

お京さんはフランス人の夫を随分愛していた。それ以上にフランス人の夫もお京さんを愛していた。だのになぜお京さんは夫から逃げたのだろう。逃げて気狂いになつたのだらう。お京さんは加奈子に水溜りを越さしたあとに加奈子の手を離さず門口まで握つて言つた。

——あなたの手を握つていると、ほんとにここにぴったり来るのよ。あなたの手は皮膚の手袋さえ穿^はめてないからね。

左側に板塀がある。雨風に洗い出された木目が蓮華を重ねたように並んでいる。誰か退職官吏の邸らしい。この辺がまだ畑地交りであつた時分^{やす}廉い地代ですこし広く買い取つて家を建てたのがいつか町中になつてしまつてうるさくはあるが地価は騰^{あが}つた。当惑と恭悦を一緒にしたような住居の様子だ。古い母屋^{おもや}の角に不承々に建て増したらしい洋館の棟が見える。一人前になつた息子のところへそろそろ客が来るようになったので体裁上必要

になったものらしい。ポータブルがロンドンシーメンズ会社で参観人へ広告に呉れる小唄を軋^{きし}り出している。「明るい燭光の電球をつけましょう。そして、顔を——」どうしてこんな盤が日本へ入って来ているのだろう。此処^{ここ}の息子はあの電気会社の取引会社へ勤めでもしているのか。

松が古葉を黄色い茱萸^{ぐみ}の花の上へ落している。門の入口に請願巡査の小屋があつてそれから道の両側^{けやき}に櫟^{けやき}の並木があり、その先は折れ曲つているので玄関はどのくらい先にあるか判らない金持の邸の並木の櫟五六本目のところでカーキ色の古ズボンを穿いた老人が乾した椎茸^{しいたけ}を裏返している。こんな町中で椎茸が栽培出来るのか。

金持の邸の玄関道が妙に曲つているのでそのカーヴの線と表通りの直線とに挟まれて三日月形になった空地がある。信託会社の分譲地の柱が立っている。ふさがっているのは表通りの右端の二区切りだけで、あとは古障子やら藁^{わら}やら一ぱい散らかったまま空いている。それ等を踏んで子供が野球をやっている。空地を覗^{うかが}うのは何国の子供も同じだ。ある夏口^{かぶとぼ}で珍らしい暑い日があつた。兜^{かぶと}帽^{ぼう}を冠つた消防夫に列んで子供が頭から水管の水をかけて貰つていたのはやつぱり斯ういう建壊しのあとの空地だった。犬のお産を子供等に見せないように天幕張りをしてしまつて居たのもロンドンの空地だった。

仲が好さそうにもあり、張り合つてゐるようにも見える二区切りの土地の上の洋館のけば
けばしい安普請の一方には歯科医、一方にはダンス練習所の真鍮札がかかっている。お京
さんはよく迷う女だ、斯ういう軒並を見せたら歯を癒なほして貰いに歯医者へ寄つてから練習
所へ行こうかダンスの練習をすましてから歯医者にしようか。まじめになつてわたしに相
談するだろうと加奈子は思つた。

また塀だ。今度のは灰色のセメントで築いてあり上に横に鼠色の筋を取つたものだ。灰
色の面には雲のように白い斑まだらが出来ていて乾性の皮膚病のようにいかにも痒かゆそうだ。人の
影がぞろぞろつながつて映つて行く。加奈子にぶつかる男もある。気がつくと坂の下の交
叉点で電車を降りて乗替えずにそのまま歩いて坂を上つて来る人が沢山増した。午後四時
過ぎ、東京という人口過多の都会の心臓はその血を休養の為に四肢へ分散するのか。で
なければこの都会の内臓は充血して化膿するだろう。

人の流れに逆らつて歩くくちよつとした非興奮音楽的行進曲。擦れ違ふさまざまなヴ
ォルトの人体電気。埃と髪油のにおい。——加奈子は午後四時過ぎが何故か懐かしい。巴
里では凱旋門の方からシャンゼリゼーの右側の歩道を通つて料理店ブーケの前を通つて公
園の方へ行こうとすると屹度きつとこういふ思いをした。ハンチングをかぶつたアパッシュ風の

男がズボンのポケットで歩るきながら錢をじやらじやらいわせる音。急に斜に外れて巴里昼間新聞を買う人の起すかすかな空氣のうずまき。首尾よく流れを逆に上り切つて桃色と白のカフェ・ローポアンで一休み。そこで喰べた胡桃^{くるみ}の飴菓子。

だが日本の通行人は急ぐように見えてもテンポは遅い。それでいて激しい感じは一層する。二つずつ向つて来る黒い瞳。奥底の知れぬ^{れいり}伶俐。カラーとネクタイが無くて襟の合せ目からシャツと胸の肉の覗く和服姿。男が女のように見えるインバネス。無言の二人連れ。アメリカ風の女の洋装。

加奈子のあとをつけて来た少年は流れの勢に押し流されもう見えなくなった。その代りにもっと小さい十三四の中学生が氣付かれないように手に握ったボールを見つめているふりをしながら溝端の石の上を加奈子と並んで歩いて来る。ちよいちよい加奈子を横目でみるところはやつぱり加奈子をつけて来るのだ。

加奈子はショールの間から短い指の手を出して拵げて裏表を見せてやる。すると顔を赭くして急に駆け出した。

お京さんが夫のアンリーのところを逃げ出す前にお京さんは加奈子にこういったことがあった。

——異人さんと一緒にいると始終用心してなきやならないのよ。いつ唇が飛びかかって来るか知れないから。

異人さんと一緒にいると我儘^{わがまま}をいうのも時間制度よ。

アンリーはあたしを燃やし尽そうとする。菜種油で自動車を動かそうとする。触つて呉れずに愛して呉れたらねえ。

まわりの静まった夜なんか二人差し向いで居てふいと気がつく、おや大変異人さんと一緒にいる。と逃げ出したくなることもあるのよ。

あなた異人さんのしよげたところ見た？　まるで子供よ。

異人さんの不器用な大股で日本の家の鴨居^{かもい}に頭をぶつけないように歩く不器用さは初めはほんとに愛嬌があるけれど見慣れて嫌になり出すとても堪らないものよ。

異人さんはやきもちやきよ。

あの人、海苔^{のり}を食べるのを稽古し出したのよ。

異人さんの愛情というものはくどいからすぐ腹が一ぱいになるけれども永持ちしないの。だからしよつちゅうちよいちよい食べなきやならない。

この頃はお豆腐を食べても舌で味い分けられなくなつたわ。始終脂^{あぶら}っこいもののお相^し

ようばん
伴　をするせいよ。

それでいてお豆腐の味が忘れられないの。だからただ見ているの。

日本の男のひと話をしただけでも怒るのよ。

ツネリ方をわたしに習ってわたしをツネルのよ。

でも、どうしても日本の男のひととお友達になりたいの、それで子供ならいいというので子供のお友達をこしらえたものの十六の少年ではいけず、十四の少年でいけず十三の育ちの悪い直ぐ顔を赭くするような子をお友達に見つけたの。名前は線二つて言うの。

加奈子は線二を一二度見た。お京さんはフランス人形と並べてその子の顔におしろいを塗ってやっていた。それは加奈子が洋行する四五年前の日本の春の午後だった。

道は下り坂になって来た。人々の帽子の上を越して電車の交叉点の混雑、それからまた向うへだらだら上りになる坂の見通し。右角に色彩を瓦屋根かわらで蓋ふたをしている果物屋があつて左側には小さい公設市場のあるのが芝居の書割のように見えて嘘のようだ。欧米の高いもの広いものを見慣れて来て、その上、二十日間も涯なき海を渡って来た加奈子の視力はまたここで距離感を失った。

もし手前の坂の左側にある小さい魚屋の店先に閃めく、青い鰻あじやもつと青い鯖さばがなかつ

たら加奈子は夢を踏んでその向う坂の書割の中に靴を踏み込めたかも知れない。だがその小魚たちは加奈子の眼の知覚を呼び覚^{さま}まして加奈子はその次の蕎^{そば}麦屋に気がつき、その次の薬屋に気がつく。伯林のカイゼル・ウイルヘルム街の薬屋へ繕^{なほ}しに預けて置いたまま伯林を立ててしまったおしろいの噴^{エア・ブラッシュ}霧筆はどうしたろう。

そこで横町へ曲った。加奈子の頭にはもう豆腐屋のことしか無かった。まだあの店はあるだろうか。永らく嬬^{やもめ}暮しをしていて、一人で豆をひいていたのだったが世話する者があって夫婦養子をしたところが入籍してしまつてから養子たちは養母をひどくいじめたという近所の噂だった。その癖、その養子たちは人の好きそうなポカンとした顔つきをしていて、むしろいじめられる養母の方が鬼瓦のようなきりよりの年増であつたが。

車の蔭に古簾が見え出して角の中に琴という字が書いてあつた油障子はペンキ塗りの硝子戸に変つているが相変らず、さらし袋のかかつている店先の山椒の木の傍で子供が転んで泣いている背中を親鶏とヒヨコがあわてて跨^{また}いで行く。

——しばらく。

加奈子は古簾に手をかけた。

——いらつしやい。おや珍らしい。

そこに居たのは嬢のお琴だ。手にビールのコップを持っている。

——みんな御無事？

——は は は は とうとうあの鬼奴らを追出してやりましたよ。裁判して勝ちましたよ。あんた洋行なすつたと聞きましたが、いつお帰り？

ビールを持つ手をやや体の蔭に隠す。

——四日ばかりまえ。

——おや、そうですか。まあどうぞお掛け。

お琴は手まめに上りはなの塵をはたいた。

——でもおばさん。よく思い切ったことしたのね。

——此頃の若いものにはおとなしくしているとつけ上がられると思ひましてね。とうとう裁判所へ駆け込みましたよ。もつともそのまえに二三度首を吊ろうとはして見ましたがね。こんなぶきりような女の死にざまをあいつらに見せたら、さぞまた悪口の種になるだろうと思いますと死に切れませんでね。そこで死に身になって料簡りょうけんを逆に取りましてね。

まえから幾らか酒がいけ、飲むと平常と違ってよくしゃべる女ではあったが今日は加奈

子に久しぶりで逢った亢奮からまた余計にしゃべり度いらしかった。

——もつとも素直には鬼奴らはあたしを家から出しませんからね。あんかを蹴つくり返しましてね。あいつらが周章あわてて騒いでるうちに家を飛び出しましたよ。跣足はだしですよ。そして最初裁判所だと思って飛び込んだのが海軍省でした。

——お婆さん、此頃毎日お酒なんか飲むの。

お琴は二つ三つわざと舌打ちして見せて、

——ええ、えい、毎日お酒も飲みますしね。亭主も持ちますしね。は は は は。

「お婆さんひらけたのね」

そこへ洋服に鞆かばんを抱えて気が重そうな若い小男が入って来た。

——お前さん、お帰りかい。あなた、これがうちのです。

その男は横目でお琴のコップを睨にらみながら、気まずそうに頭を下げた。

——むかしつからよくごひいきにして頂いたんだよ。よくお叩頭しげしてお礼を言いなさいよ。

それから加奈子に向って、

——この人、生意気に頭なんか分けてるんですよ、お婆の、かみさん持ってるくせに。

若い小男は急に頭を持上げて小声で怒鳴った。

——ばかッ——。また酔っぱらったな。

それからさっさと土間からかけてある梯子段はしごだんで向うむきのまま靴を脱ぎ、メリンスのカーテンの垂らしてある中二階へ上って行つた。

——あんなに怒った顔をしていても直ぐに何でもなくなるんですよ。あたしや、すっかり男のこつを覚えましてね。今から考えるとやり方によつては先の亭主もあの養子野郎もあんなに増長させずに済んだと思いますよ。一たい男はおとなしい女は嫌いですね。

——おばさんお豆腐をこしらえる道具はどうしたの。

——あなたが洋行して居なさる間に世の中が変りましたね。いまこんな小さい豆腐屋では自分とこで品物はこしらえませんですよ。会社がありましてね、そこで大げさに製こしらえて分けるんです。あたし達はその会社の株主でもあり支店でもありますんでね。それから納豆も。

加奈子が差し出した手提げの菓子鉢をしきりに珍らしがったあとでお琴は真鍮の庖丁を薄く濁っている水の中へ差し入れ、ぶよぶよする四角い白い塊かたまりを鉢の中へ入れて呉れた。庖丁の腹で塊の頭を押えて大事そうに水を切る。

——おお、恐かった。こんな立派なものへお豆腐なんか入れるのは始めてですからね。で

すがこうすると、とても引つ立ちますね。まるでお豆腐には見えませんね。

加奈子が代価を払って店を出かけるときお琴はあわてて立って追って来た。

——あのロンドンにいるとかいうお豆腐屋さんとはなかなかよすとか死ぬとかしそうにはありませんかね。

——まあ、どうして。

——いえね。もしそんなことでもあつたら一つ向うへ押し渡って豆腐屋でも始めようと思ひましてね。男つていうものは割合に変わりもの好きですからね。飽きさせないようにするのが一苦労ですよ。とてもうちにはこどもなんか生れそうもありませんからね。

加奈子はいくつもおしやべり婆さんのところにいつまでもいたくなかった。早くお京さん

に逢い度かった。お京さんへの土産みやげに買つて来た伊太利イタリーフロレンス製の大理石のモザイ

クが小さな箱に納まつたブローチとなつて加奈子のポケットへ忍ばせてあつた。加奈子は

婆さんのおしやべりに飽き飽きして片方の手をコツンと箱にさわらせた。そして一方の手

で豆腐をいれた皿にはめた黒い鉄の提げ手を取つた。加奈子のショールの外へ出た丸い手

の薄皮にはほんのり枝を分けて透けて見える静脈が黄たそがれ昏を感じて細くなつてゐる。貧しい

町を吹きさらして来た棒のような風が豆腐を慄わせる。加奈子は何となしの悲哀に薄く涙

のにじんだ眼で眺めて、崖の上のテニスコートに落ちる帰朝後四日目の太陽を惜んだ。

日本の娘さんと正式の結婚をしたい。仏蘭西人アンリーのこういう願いからお京さんはアンリーに貰われた。アンリーはリヨンで王党の党員だったが矯激の振舞いがあつたのでしばらくフランス縮緬ちりめんの輸出の仕事を請負つて東洋へ来た。フランスから日本へは、たいした輸出品もないのだが、その中でも女の洋服地が一番崇高なものである。それで崇高な交易の途を追つて日本へ来た。日本へ来てからは母国で矯激な振舞いなぞあつたとも見えぬような律義な青年だった。千代田のお城の松をしきりに褒めていた。そうかといつて丸の内に建て増す足場無しに積み上げて行くアメリカ式のビルディングも排斥はしなかった。あれだつてやつぱり日本人が拵こしらえたところはよく見えますよ。細部の行き亘わたつているところがやつぱり日本の建築ですね。などと如才なく言つて居た。

お京さんの家はちよつと大きい牛乳屋だった。×××種の牛を輸入して新聞に写真の広告を出していた。アンリーの家へも牛乳を入れていた。西洋人に異様な興味を持つ年頃であるお京さんは配達夫が持つて行く牛乳の壘びんに日本の名所の絵葉書なぞ結びつけてやった。そんなことは一二度に過ぎなかつたのだけれど、そのときアンリーから心付けを貰つた配達夫はその後自分で絵葉書を買つて配達壘に結びつけお京さんの好意だといつて心付け

を貰った。そしてお京さんがアンリーを忘れてしまった時分にすっかり馴染なじみがついたつもりもりののアンリーはお京さんとその両親を晚餐に招いた。三人は行った。

それから本当に馴染がついてしまつてアンリーもお京さんに嫁の望みを言い出せるようになった。お京さんはうかうかしていた。土族から率先して牛乳屋になつた程の両親が外国人に望まれるということに誇りを感じ、かたがた若い西洋人のひとりものらしい肩のこけように義侠心を起し一人娘をやると決心した。

——うちの三代目はあいの子でさ。

父親は頭を掻きながら遇う人に結婚を吹聴した。

純粹の日本風でというので結婚式は大神宮の神式で行われた。白百合の五つ紋の黒紋付できちようめんに坐つたアンリー。高島田に笄こうがいが飴色うさぎに冴さえているお京さん。神殿の廊下の外には女子供が立集つて、きやきやと騒いだ。加奈子もまじった。列席の二三の親しい友達は不思議な美にうたれた。

まわりのものの心配するほどのこともなく二人は日本人同志の新郎新婦のように順当に半年を過した。アンリーの覚束おぼつかない日本語。お京さんの覚束ないフランス語。その失敗だけが面白そうに友達に報告された。

半年を過したある日のこと加奈子は萩の餅を持ってお京さんの家を訪ねた。お京さんはテーブルの上で万年筆で習字をして居た。女学校で使った横文字の古い習字の手本が麻のテーブル掛けの上に載っていた。お京さんは萩の餅をフォークで西洋皿に取り分けながらいった。

——異人さんはやっぱり異人さんね。

取り分けた皿を三角戸棚の中へ蔵しまいに行くときお京さんの和服の着ようの腰から裾にかけてのしまりが無くなっていたのに加奈子は気付いた。西洋人の女優の扮するお蝶夫人の恰好になっていた。加奈子のはつと思つた。それから行くたびに何かかにか愚痴が出るようになり、程なく遂々とうとうお京さんはアンリーから逃げ出した。行先を知っているのは母親と加奈子だけだった。父親は母親に押えられて強て居所しよも訊かなかった。

アンリーは狂気のようになって探し廻つた。お京さんの実家へ訴えた。どうにもしようがなかった。国籍のことからまだ届けはしてなかったので公には出来なかった。

露地の中の隠れ住いを二ヶ月ばかりしてお京さんは身体の為に海岸の療養院へ転地した。そこへ、お京さんが立つときと加奈子が洋行するときと殆んど一緒だったので両方忙しいなを繰り合せて隅田川の流れに沿っている鰻屋うなぎの二階で二人は訣わかれを惜んだ。お京

さんは言った。

——人間に魂つてもものがあるのでしょうか。

加奈子はこれによく答え得なかった。それとみてお京さんは返事を受取るのをやめて言った。

——人間に魂があるとしても、あたしの魂には何んだかさっぱり殻のようなものが出来てしまつてゐるようね。だからどっちへ向けても人の魂と触れた感じはしなくなつてしまつたのね。ああ、人間で魂と魂と触れ合うという感じはどんなものでしょう。

——そうしてお京さんは加奈子の丸い手を執つた。

——いまあたしにはこの手だけがほんとに物を握つてゐるよう感じられるだけよ。

——そう言つてお京さんはさめざめと泣いた。上げ潮の芥に横転縦転する白い鷗かもめがビール会社れんがの赤煉瓦を夕暮にした。寂しい本所深川のけむり。

——とにかく西洋人というものをよく見きわめて来てあげましょう。

——せめてこういうのが加奈子のお京さんに対するたった一つの慰めだった。

加奈子は歐洲の三都に移り住むごとにお京さんには簡単な手紙を出した。お京さんから殆んど返信はなかった。然しかしいざ帰るといふしらせを受取ると、子供のように早く早く

という帰朝の催促状をよこした。そしてところも加奈子の家から七八町ばかりの裏町に家を借りて母親と住み出したらしい。アンリーは事情を承知して其の儘お京さんの病気が癒つて戻つて来るのを、ひとりのままで待つているという。

電車の通つたあとの夕闇に光つてごうごうと鳴る線路をゆるく駆けて通るときに、どうしたはずみか慄えて手提げのなかの豆腐にくぼみが出来たのをそのままにして向う横丁へ入つてお京さんの家を染物屋で聞くと、直ぐわかった。竹垣の外にちやほびのある平家^{ひらや}で山田流の琴が鳴っている。加奈子は格子を開けて言った。

——お京さん。あたしよ。帰つてよ。

すぐ琴がとまつた。

——アントレ！

そして飛びついて来たお京さんの勢いで折角^{せっかく}の豆腐はこなごなになった。お京さんの病気はまだすっかりなおつて居ない。そして少し気の狂つた病的な円熟が中年の美女のいろ艶を一層凄艶にして居た。

「あなたに逢つて何もかもうれしい」

そして、その襖^{ふすま}を開けて出て来た少年に向つて言った。

——喜与司さん、このお方のお手々に握手なさい。

加奈子の丸い手が少年の濡れてるように、しなやかな小さい手と握り合った。加奈子はそれがさつき加奈子のあとを二度目につけた少年であることを発見した。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年2月24日第1刷発行

底本の親本：「鶴は病みき」信正社

1936（昭和11）年10月20日発行

初出：「三田文学」

1934（昭和9）年6月号

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

豆腐買い

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>